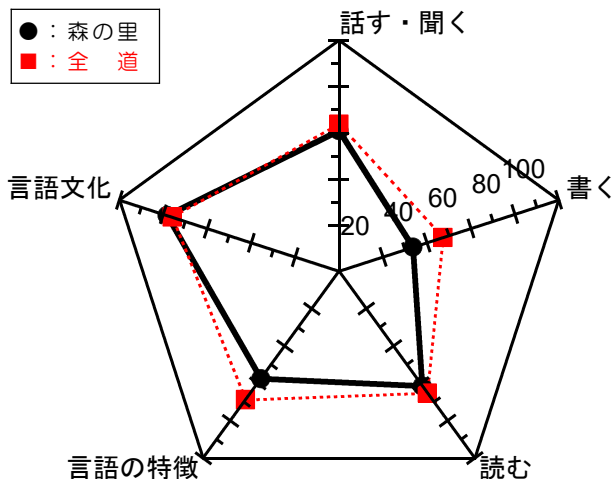


調査結果概況「国語」

グラフ1



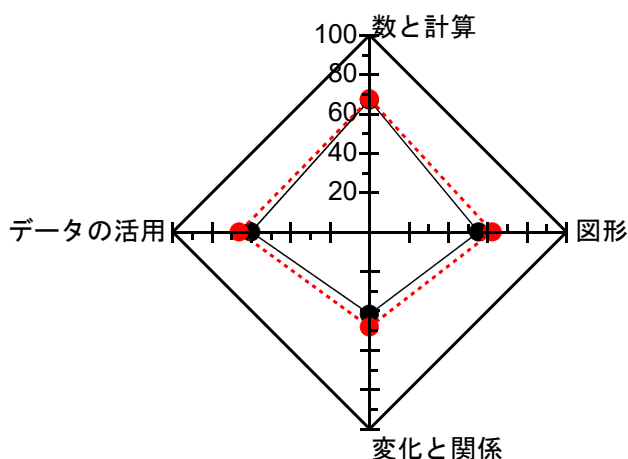
	平均正答数	平均正答率
本 校	8.0 / 14	57%
北海道	9.0 / 14	64%
全 国	9.2 / 14	65.6%

観点	対象問題数	平均正答率
話す・聞く	2	60.9%
書くこと	2	33.7%
読むこと	4	61.4%
言語の特徴	5	57.4%
言語文化	1	78.3%

＜傾向と改善プラン＞ 本校では、正答数12問の児童が最も多い。中央値が8（北海道・全国は10）であることから、全体の底上げが必要である。正答数が低い児童への支援、学習内容の定着が大きな課題である。また、正答数12問及び13問の児童へのさらなる定着が、全体の学力向上につながるであろう。グラフ1からは、「書くこと」に関する領域で大きな課題がみられる。これは、目的に応じて要約したり考えを書いたりという記述式の回答に慣れていくことが必要で、授業の中に意図的に取り入れるとともに文字数を決めて書くといった短作文の活動に継続的に取り組んでいくことで改善を図りたい。

調査結果概況「算数」

グラフ2



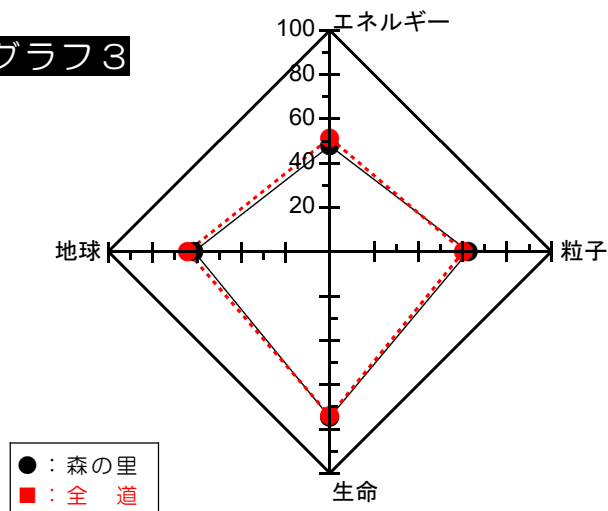
	平均正答数	平均正答率
本 校	9.1 / 16	57%
北海道	9.8 / 16	61%
全 国	10.1 / 16	63.2%

観点	対象問題数	平均正答率
数と計算	6	67.0%
図形	4	55.4%
変化と関係	4	41.8%
データの活用	3	60.1%

＜傾向と改善プラン＞ 正答数が12問の割合が最も高く、10問以上正解の児童が5割を超えている。少人数指導を充実させることで、正答数の低い子に対する支援を図り、全体の底上げにつなげていく。そして12問以上の児童に対するさらなる定着が、全体の学力向上につながると考えられる。グラフ2からは、数と計算領域での着実な成長が見られるが、数量関係（割合）領域での定着が不十分であることがわかった。文章問題から必要な数に着目して、数量関係を求める問題を繰り返すことが必要である。また、図形領域からは、プログラミング学習の充実を図っていくことが必要である。

調査結果概況「理科」

グラフ3



	平均正答数	平均正答率
本校	10.6 / 17	63%
北海道	10.7 / 17	63%
全国	10.8 / 17	63.3%

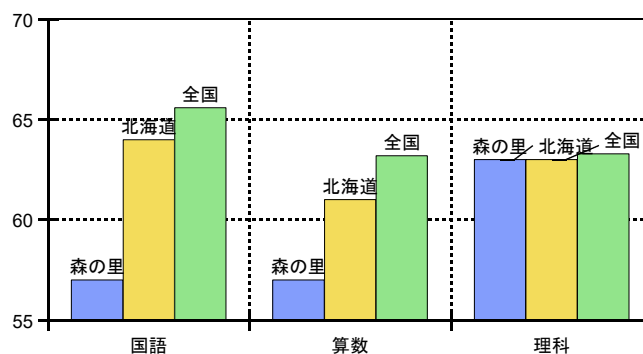
観点	対象問題数	平均正答率
エネルギー	4	47.8%
<u>粒子</u>	5	<u>62.6%</u>
生命	5	74.8%
地球	5	61.3%

＜傾向と改善プラン＞ 正答数が12問の割合が最も多く、16問正解も全道・全国を大きく上回っている。12問以上正解の児童が5割を超えていることから、実験や観察を通して理科に対する興味関心が高いことがわかる。また、「知識・理解」においては、全道・全国平均を上回っている。グラフ3からは、どの学習領域においても、ほぼ全道・全国平均に達していることがわかる。基本的な知識や技能は定着が見られるので、実験の結果から、根拠を明確にして自分の考えをまとめる力の育成を図ることが必要である。

教科間の比較

グラフ4

	問題数	平均正答数	平均正答率
国語	14	8.0	57%
算数	16	9.1	57%
理科	17	10.6	63%



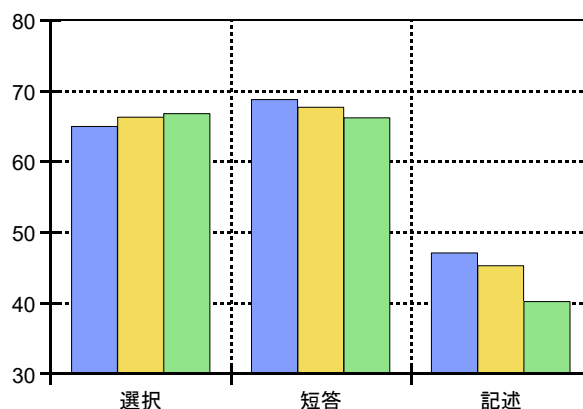
＜傾向と対策＞

国語と算数ともに全道・全国を下回ったものの、算数については全道との差はやや縮まっている。これまでの研究による授業改善に加え、少人数指導の成果が現れてきている。引き続き、算数科の平均正答率向上に向けて、組織的な取組が必要となる。具体的には、ICT活用による個に応じた指導・支援と少人数指導（必要に応じて習熟度別指導）の充実を図っていくことが必要である。また、研修部とも連携し、「理由や根拠を明確に」「交流」「振り返り」をもとにした授業改善を図っていく。

問題形式による比較

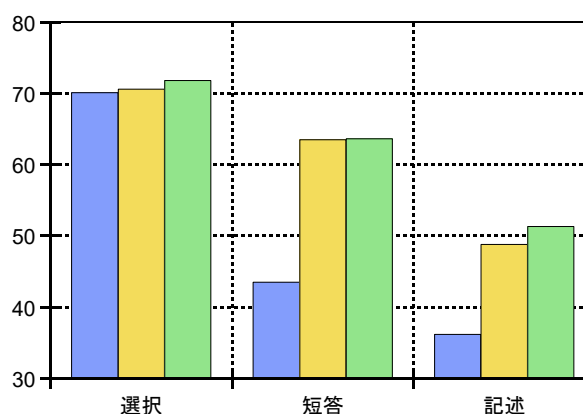
< 国 語 >

	選択式	短答式	記述式
森の里	70.1%	43.5%	36.2%
北海道	70.6%	63.5%	48.8%
全 国	71.8%	63.6%	51.3%



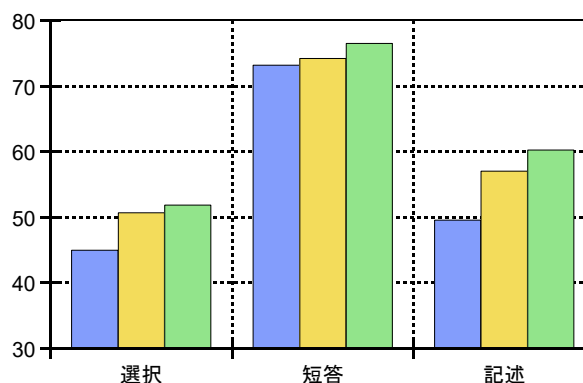
< 算 数 >

	選択式	短答式	記述式
森の里	44.9%	73.2%	49.5%
北海道	50.6%	74.2%	57.0%
全 国	51.8%	76.5%	60.2%



< 理 科 >

	選択式	短答式	記述式
森の里	65.0%	68.8%	47.1%
北海道	66.3%	67.7%	45.3%
全 国	66.8%	66.2%	47.3%



< 傾向と対策 >

国語では、選択式は全道全国との差は見られないものの、短答式（漢字）で大きな課題が見られたことから、既習事項、基本的事項の未定着が原因と考えられる。家庭と連携し、繰り返しの練習（宿題や家庭学習）が必要であり、自主的な学習習慣の定着を図ることで改善をしていく。また、記述式では無回答も多かったことから、「書くこと」に対する課題が大きいことがわかる。昨年度から取り組んでいる朝活動の短作文（考えを整理して書くことや相手に伝わるように書く活動）を継続するとともに、読書活動による読解力の育成を低学年から取り組んでいかなければならない。

算数においては、選択式や短答式では全道全国を下回ったものの、これまでの成果が現れている。また、記述式では課題は大きいものの、無回答は少なかったことから、数年来の授業研究を通して「自分の考えを書いたり、交流したりする」姿勢が身についてきたことが考えられる。既習事項、基本的事項の定着については国語と同様に、家庭と連携した繰り返しの練習（宿題や家庭学習）が必要である。

理科では、どの問題形式においても児童は最後まで粘り強く、一生懸命に取り組む姿が見られた。特に短答式においては、全道全国を上回る結果となった。記述式においても無回答は比較的少ないことから、根拠を示したり、条件に合わせたりしながら自分の考えをまとめる力の育成が必要である。

検証改善サイクルをふまえた年間スケジュール

	全国学力学習状況調査	チャレンジテスト	標準学力調査
4月	全国学力学習状況調査 自校採点の実施 結果の分析と検証 (情報共有)	前年度問題への取組 採点 結果の検証 (情報共有)	結果及び課題の確認 (新担任)
5月	授業改善への反映 授業改善の継続	授業改善への反映 次回への目標設定 授業改善の継続	授業改善への反映 目標設定 授業改善の継続
6月		1学期末問題への取組	
7月		採点 結果の検証 (情報共有) 授業改善への反映 次回への目標設定	
8月	授業改善の継続 授業改善への反映 授業改善の継続	授業改善の継続 1学期サポート問題 採点 結果の検証 (情報共有)	
9月	個人単票の課題確認 保護者への配布 家庭との連携 (共有)	授業改善への反映 次回への目標設定 授業改善の継続	
10月	家庭学習の充実 家庭学習の見直し 家庭学習と授業の融合		
11月	習慣・定着状況の確認 結果の分析と検証 (情報共有)	2学期末問題への取組	
12月		採点 結果の検証 (情報共有) 授業改善への反映 次回への目標設定 授業改善の継続	標準学力調査実施
1月		2学期サポート問題 採点 結果の検証 (情報共有) 授業改善への反映	
2月	過去問題への取組 定着状況の確認 過去問の取組	次回への目標設定 授業改善の継続 学年末問題への取組	結果の検証及び分析 授業改善への反映
3月	対応策及び改善案作成 (情報共有) 授業改善と取組継続	採点 結果の検証 (情報共有) 授業改善への反映	次年度の目標設定 授業改善の継続